

## 〔特別講義要旨〕

## 『パーシャルデンチャーの支持と維持について』

愛知学院大学歯学部歯科補綴学第一講座

教授 平 沼 謙 二

日時：1992年1月21日（火） 9：30～11：00

パーシャルデンチャーを装着する口腔内は被圧縮性が大きく異なる歯根膜、顎堤粘膜と変化に富む状態であり、全部床義歯と橋義歯装着時に考慮する機能時の維持、支持さらに安定をすべて加味した対応を行うことになる。同時に、欠損状態、咬合状態などを含めての既往歴と現病歴を十分に把握し、それに基づく診断の下で義歯の設計を行うことになるが、義歯は口腔内に安定し、異物感の少ないもので、患者より優れた評価を得るものでありたい。

ここで述べるパーシャルデンチャーの支持と維持はすでに講義、実習より十分認識されている基本的事項と考えるが、視点をかえ総合した形で愛知学院大学歯学部で教育している体系を示すことにしたい。

まず、基本としての義歯床による粘膜支持、レストによる歯根膜支持は重要であり、ついで維持のあり方を考えることになる。この支持を主体としたパーシャルデンチャー設計の手順を義歯構成要素より示すと、

- 1) 欠損部に対する義歯床形態（床外形）
- 2) レスト
- 3) 隣接面板
- 4) 大連結子
- 5) 維持装置
- 6) 小連結子

の順で行うことになる。

この1)～4)の設計により支持と拮抗性が確保できれば、5)の維持にとくに大きな期待を持つことはない。

義歯に必要とされる維持力を実験的に検討した結果をみると、上下顎とも義歯の離脱力に500

gより1kgまでの抵抗があればよいことが示され、これ以上の力は必要ないものと考えている。また、別の実験によると小臼歯に0.25mmのアンダーカット量を与えた2腕鉤（白金加金合金による鑄造鉤）は平均400gの維持力があるので、これらの実験値を参考として適正な維持を与えることが一つの指標となる。

維持装置としては線鉤、鑄造鉤がともに利用されるが、それぞれの特性を実験値と臨床より得られた値を参考とし必要最小限の維持とし、支持を主体とした義歯形態を考えるべきである。とくに鑄造鉤の維持力は、鉤腕の断面形態、利用するアンダーカット量に大きく左右されるので不当な単に強い維持を得るなどのないように注意すべきである。

義歯の安定は維持歯の保全につながるが、義歯に加わる側方力を可及的に軽減する手段として、維持歯に形成、設置される誘導面と義歯の隣接面板は有効に機能するので、その拮抗性を考慮した位置関係は重要である。この拮抗を考慮した維持装置として、維持腕を線鉤、拮抗腕を鑄造鉤によるコンビネーション鉤がある。

支持と維持に対してはさらに調和、協調した咬合の付与、また義歯の精度や各分野で得られた貴重な業績を組み入れて考えることになり、ここではその一部を示したにすぎない。しかし、パーシャルデンチャーの設計に際しては、口腔残存組織の保全を優先し、機能回復が十分にはかれる支持を主体とした義歯を作製すべきである。  
(担当：歯科補綴学第1講座)